

念仏、真言、禪、律について

御祖師様が当時の仏教諸宗の中で、もっとも勢力があったため、お折伏の相手、四箇格言の対象として簡ばれた四宗の概略を記してみましょう。

念仏宗

念仏宗は中国で浄土教の名のもとに四世紀頃から盛んになり、三流ほど流れがありましたが、そのうち善導（613—681）の弘めた称名念仏（阿弥陀仏の名号を称(とな)える）が日本に強く影響を与えました。

日本では、もともと、天台宗の教えに四種三昧(ししゅざんまい)という修行があり、その中の常行(じょうぎょう)三昧が念仏を称(とな)える修行であったために、まず円仁が唐から浄土教を移入し、後に、天台座主(ざす)であった良源(りょうげん)(912—985)が「極楽浄土九品往生義(ごくらくくほんおうじょうぎ)」を、慧心僧都源信(えしんそうずげんしん)が「往生要集(おうじょうようしゅう)」を著したのがキッカケとなって徐々に念仏が広がりました。しかし、宗派を形成するまでには至りませんでした。後に法然(ほうねん)（1133—1212）が出るに及んで、浄土宗が成立しました。

今日では、その法然を宗祖としている浄土宗、法然の弟子、親鸞(しんらん)を開祖とする浄土真宗、さらに法然の弟子証空の孫弟子に当たる一遍(いっぺん)が開いた時宗などがありさらに浄土宗や真宗はそれぞれ細かく分派しています。そのほかの系統として融通(ゆうづう)念仏宗という宗派もあり、永久 5 年(1117 年)、良忍(りょうにん)が阿弥陀仏の直説として感受したという偈文（げもん）に基づき自他ともに称(とな)える念仏が融通して功德があるとして念仏を日課として勧めました。

浄土宗を開いた法然はもっぱら阿弥陀仏の名を唱えて西方の極楽浄土に往生することを説き、これが戦乱や飢饉、疫病、経済苦などいわゆる三災七難に苛まれている人々に受け入れられたのか、広がりを見せました。浄土宗の経典としては無量寿経(むりょうじゅきょう)・観無量寿経(かんむりょうじゅきょう)・阿弥陀経(あみだぎょう)の三経（浄土三部経）と世親(せしん＝天親てんじん)の往生論を加えた「三経一論」を正依の経論としています。その中でも特に観無量寿経を中心として、この経に対する注釈である善導の観無量寿経疏の説を重んじて一宗として法然が開いたのです。

法然は、もと天台宗比叡山で学んでいましたが、承安 5 年（1175 年）比叡山を去って東山の吉水に移り住み一向専修(いっこうせんじゅ)の念仏を始め、建久 9 年（1198 年）には、選択本願念仏集(せんちやくほんがんねんぶつしゅう)を著して浄土宗としての教義を明らかにしました。これが問題で、その中で法華経は有難いには違いないが、修行するには難しすぎるから、「捨閑擲抛(しゃへいかくほう)」(捨てよ、閉じよ、さしおけよ、なげうてよ)と言っているのです。そして、

「しばらく聖道門(しょうどうもん)をさしおきて、選(えら)びて浄土門に入れ」

「浄土門に入らむとおもはば・・・選(えら)びてまさに正行に帰すべし」

「正行を修せむとおもはば・・・選(えら)びてまさに正定をもはらにすべし。正定の業といふは、すなはちこれ仏の名を称するなり」と念仏を称(とな)えて阿弥陀仏の本願により極楽に往生することを勧めたのです。

これに対して、念仏を称(とな)えても決して極楽往生できないどころか、念仏は無間の業と御祖師様はお折伏されているのです。念仏無間という言葉は御遺文中、いたる所にあり、問て曰く、当世の念佛者無間地獄と云ふ事、其故如何。答へて云く法然の選択に就いて云ふなり。

（当世念佛者無間地獄事
昭定 311 頁）

此十二年が間、念佛者無間地獄と申をば

（南条兵衛七郎殿御書 昭
定 326 頁）
などと仰せです。

浄土真宗は親鸞(しんらん)（1173—1262）を開祖としており、かえって浄土宗よりも今日では隆盛を誇っています。親鸞は綽空(しゃくくう)、善信(ぜんしん)とも称し皇太后宮大進日野有範(ひのありのり)の子という貴族の名門に生まれました。母を幼くして失い、9 歳で出家し比叡山で修行、 29 歳の時、六角堂に参籠し、後、吉水に法然をたずねてその教えを請いました。親鸞は「教行信証」を著しましたが、その成立をもって立教開宗としています。やはり、弥陀本願の名号をそのまま信受することによって、ただちに極楽浄土へ往生することが決定し、そののちは報恩感謝の念仏生活を送ると言っています。そして、すべては名号となっはたらく阿弥陀仏の力によるのであり、われわれ凡夫の力ではないとし、絶対他力(ぜったいたりき)を強調します。したがって、凡夫のはからいをすべて捨てて、法然が弥陀の本願にたのむために認めた最低限の修行さえ無用であるとするのです。浄土三部教の中では大無量寿経を中心としています。

御祖師様と親鸞は時代的には重なるのですが、会われたことはなく、御祖師様のご在世の時に流行していたのは法然の念仏宗でしたから、御祖師様はもっぱら法然に対して破折されています。